

江戸城大奥女性の代参について

（鼠山感応寺の事例を中心に）

望 月 真 澄

一 はじめに

代参とは、「日本史広辞典」によれば、「だいまいり」とも。代拝とも。本人にかわって、神社仏閣に参詣・参拝すること。代参するその人もいう¹⁾とある。江戸時代の庶民にあつては、金銭的な面や街道の通行規制もあつてか、なかなか神社仏閣に参詣できなかった。そこで、代参講²⁾という名称で、その講中の中から籤引きなどの方法で代表の参拝者を決め、代参者は講員を代表して神社仏閣に参詣し、メンバーの御札や御守を求め、祈願を依頼していた。武家にあつても、家臣や大奥女中が代わつて参詣することが頻繁に行なわれていたのである。

筆者はかつて武家の女性の中でも、將軍家に仕える江戸城大奥女性と日蓮宗寺院との信仰的なつながりについて論究したことがある³⁾。しかし、従来、両者の関係は、谷中感応寺事件・谷中延命院事件・智泉院事件といった艶色事件で捉えられ⁴⁾、信仰的な側面はあまり語られていない⁵⁾。むしろ、大奥女性の寺院参詣にしても、信仰面はなかったかのような見解が通説である。よつて、本稿では、江戸城大奥女性とゆかりのある江戸鼠山感応寺を事例に取り上げ、代

江戸城大奥女性の代参について（望月）

参という参詣形態の実態分析から両者の関係について検討し、信仰的なつながりについて探ってみることにしたい。

二 感応寺の概観

鼠山感応寺の成立と展開については、宮崎英修氏が既に論究しており、感応寺の取立てから破却に至るまでの経過について関係史料を紹介し、分析している。⁶⁾この寺院について、寺門静軒は「江戸繁盛記」の中で、谷中感応寺・湯島天神・目黒不動を「大江戸の三富」と呼び、千両取の富突で天下に知られていた寺院であったとしている。⁷⁾中老僧日源を開山とし、江戸時代初期には池上本門寺の末寺であったが、元禄年間に不受不施を主張して元禄十二年(一六九九)に天台宗に改宗させられた寺院である。その後、天保四年(一八三三)に護国山天王寺と改称している。⁸⁾ここでは、この感応寺の成立に至る過程について、金子十徳が記した「榎楓」⁹⁾という史料を用いて概観してみたい。それでは、同史料から感応寺の成立に関する記載事項をピックアップし、年譜形式にして紹介してみることによよう。

感 応 寺 年 表

年月日(西暦)

内

容

天保 四年十月

池上本門寺・比企谷妙本寺両山の兼職、四十八世日萬、感応寺の退転を嘆き、寺社奉行

(一八三三)

脇坂中務大輔忠薫へ伝える。安藤家の下屋敷を召し上げ、新規に一寺建立の願いを出

す

十月十七日 寺社奉行脇坂侯へ願文を捧げる

十二月十三日 執政水野出羽守へ一寺建立の台命を伝える

天保 五年正月十六日 地所三万坪、堂宇は釈迦堂・祖師堂・経蔵・五重塔・鎮守堂・宝蔵・鐘樓・鼓樓・山門・

(一八三四) 総門・中門・本坊向客殿・玄関・書院・庫裏・住持居間・文庫蔵・雜蔵・番所・塔中十

軒の御取建の願文を出す

六月一日 江戸城へ登城する

九月十九日 安藤家下屋敷地所を拝領する

天保 六年閏七月十日 本堂が建立される

(一八三五)

天保 七年 正月二十四日 地祭修行する

(一八三六)

十二月十二日 本尊入仏供養が厳修される

天保 九年 七月二十日

(一八三八) 一 二十七日 開堂供養が厳修される

天保十二年十一月九日 御朱印を始め、代々尊牌・大黒天像・緋幕等を阿部伊勢守へ納める

(一八四一)

十一月十三日 鼓樓、取壊される

江戸城大奥女性の代参について(望月)

江戸城大奥女性の代参について(望月)

十一月十七日 祖師像、池上へ退座となる

十一月二十一日 日詮、池上檀林照榮院へ退身する

十二月七日 日詮、随身の僧残らず引払う

天保十三年 正月 本堂、取壊され、材木を比企谷へ引き移したい願いを出す。お聞き済しの上、手当てと

(一八四二) して金五百両を給わり、取壊される

二月二十九日 本堂、残らず取壊される

この年譜からみると、感応寺は天保五年(一八三四)の創建で、境内は二万八千六百五十坪と、壮大な寺域であったことが知られる。御朱印高三十石、本山の真間山弘法寺と同格で池上本門寺の支配となっている。池上本門寺四十八世・鎌倉比企谷妙本寺両山兼職の日萬は、天保四年(一八三三)十月十七日、感応寺の退転を嘆き、寺社奉行脇坂中務大輔忠薫にこのことを告げた。しかし、感応寺は山号を転ぜられて護国山天王寺となり、寺号を拝領している。

そこであらたに再興の願いを出したのである。これが幕府に受け入れられ、長耀山感応寺の寺号が下し置かれ、新規にお取り立てとなった。これについては、十一代将軍家斉側室お美代の方の肝いりがあつたからといわれている。¹⁹⁾お美代の方は、文化三年本丸御次となり同七年御中藹、十年に溶姫(加賀前田斎泰夫人)、十二年に仲姫(死亡)、十四年に末姫(広島浅野斎肅夫人)を出産し、将軍家斉の寵愛をうけていた女性である。²⁰⁾地所は、安藤対馬守の下屋敷が召し上げられ、本門寺へ寄付した形がとられている。同年十二月十三日、水野出羽守へ一寺建立の台命を伝え、翌五年(一八三四)六月一日にお取り立てとなったわけである。

天保六年(一八三五)に地均しが始まったが、「日蓮宗門の徒日々に集り、土を選び千本突といふ事をいたす、後

には一群一群の目じるし、揃への手拭揃への着物など、老若の男女交り、けふは何方の奥向、いずかたの御守殿女達と、賑やかなるに付ては、又夫を見物せばやとて、他宗の者も打交り、日に日に繁榮」と、江戸の講中は幡を立てて押し出し、大奥女性が千本突きに参加するという珍しいこともあった。この状況について、「女は縮緬その他結構な衣裳のまま或は板じめちりめんなどのたすきを掛けたるものあり、侍女すらかくの如し、農工商において皆こぞ集ま、その数おびただし、一日に何万か計り難し。この日本丸女中加賀侯の女中も来りて地均しするなど前代未聞というべし」と、感応寺の賑わいは相当なもので、大奥女性が参加している姿が如実に記されている。

感応寺の境内は、釈迦堂・祖師堂・経藏・五重塔・鎮守堂・宝藏・鐘樓・鼓樓・山門・惣門・中門・本坊向客殿・玄關・書院・庫裏・住持居間・文庫藏・雜藏・番所・塔中十軒といった堂宇が建ち並び、想像を絶するほどの規模の大寺院であった。周辺の状況について、「江戸風俗総まくり」には、「出精して頗る靈場大伽藍と成る物から農家忽ち料理店と替り、会式夜籠り師走の市漸々繁榮の兆を顕す」と感応寺が鼠山に再興されてから、その周辺が賑やかになつた様子が記されている。

次に、「榎楓」に記載される感応寺の縁起から概要を探つてみたい。

遙に遠く谷中感応寺（今は護国山天王寺と改号）由来を尋るに、文永年中高祖上人佐渡流罪の所、兼て天下をいさめ給ひし立正安国論の本文に違はず、鎌倉に合戦おこりしかば、始て凡人にあらざる事を知り、いそぎ赦免ありて鎌倉に帰らせ給ふ。折から武州谷中の郷を過給ふ所に百姓の妻なるもの難産に悩、前に左遷の折から、同国新倉において隅田五郎時光の妻の難産を救ひ給ひ靈験をや聞しりけん。折よく上人鎌倉へ帰らせ給ふと聞、いそぎ我家に請じて安産を願ひしかば、上人曼陀羅を認給はんとするに、紙さへ貯なかりしかば、邊りを見いだし給

ふに新しき杓子有。則上人此杓子へ十界の諸尊を勧請し給ひ、かの杓子へ向て折念し給へば頓に安産せしとかや。其後身延山に閉居ましましける。然るに此れ谷中の郷に有徳なる郷士あり。其名を 数馬と云、其父を勘次郎長耀入道道歎と云。隠室を結びて住けるが、此靈験を聞、頻りに宗門に帰伏しける折節、高祖身延山より当国池上左衛門太夫宗仲が館に逗留ましましけるを聞て、道歎則池上に詣でまみえ奉り己が隠宅を転じて道場を営ん事を願。高祖聞し召、幸ひ当国碑文谷法華寺の日源聖人をして開山とし給ひ、道歎坊の実名長耀を以て山号とし長耀山感応寺と号。日源聖人命を蒙り谷中を草創し、彼杓子を御服蔵として、則高祖の尊像を刻みて当寺の本尊とす。（後略）

これによれば、宗祖日蓮佐渡流罪の折に廻り、難産の者に杓子をもつて十界の曼荼羅本尊を勧請し、これにより安産となつた靈験が記されている。碑文谷法華寺は日源を開山に仰ぎ、杓子によつて刻んだ尊像が奉安されるといわれているが、現在は谷中瑞輪寺の安産しゃもじの祖師像となつて祖師堂が建立され、礼拝されている⁽¹⁵⁾。感応寺の堂宇の中心となる本堂の本尊は、

左脇 大黒天秘仏 文恭院隨身仏

天保十二年閏正月十二日広太院上意によつて御側坊主栄嘉持参して当寺に納める 本堂脇
に奉安

本尊 宗祖日蓮大菩薩 読経坐像 施主は当御丸大奥女中衆にして世話人は山岡勝井女性

天保六年三月二十一日池上本門寺四十八世日萬上人開眼

右脇 大國阿闍梨日朗菩薩 念珠の坐像

開山賜紫妙華院日萬上人持經坐像 日萬上人自作開眼

と、日蓮（祖師）坐像を中心に、脇に大黒天・日朗坐像といった勧請である。日蓮坐像は、読経像で「感応寺興隆記」にも「此度御本丸大奥女中寄進方御発起二而祖師之像出来感応寺江御納相成候」とあるように、江戸城大奥女性の寄進による本尊であった。大黒天も十一代將軍家斉の隨身仏といった由緒となっている。この本堂は、天保九年（一八三八）七月二十日より八日間開堂供養を行なっているが、この折の導師は、中延法蓮寺日詮が勤めている。しかし、この栄華を極めた感応寺も、幕府の天保改革の風紀肅正もあつてか、わずか六年後の天保十二年（一八四一）には取り壊されることになった¹⁷。取り壊しの理由は、將軍家斉の死去、水野忠邦の政策、新興勢力をねたむもののがん訴があげられている¹⁸。当時の随筆にも、「世は代押うつり、越州無益の莊観也とて、是迄御取立の大寺を悉く壊捨、本尊は本門寺へうつし、歌舞伎座を浅草山の宿（中略）此鼠山の余れる地へ住ましましたり、嗚呼感応寺往古悲田派を罰して台宗にかはりしを、御再興のために却て名目を亡ほしぬ」と、世の中の移り変わりとともに短期間に感応寺が隆盛を極め、廃寺となったことが記されている。

三 武家・大奥女性による感応寺への代参

まず、感応寺と大名・その大奥女性の代参についてみていきたいと思う。

大名の参詣は、表1に示す通りであり、史料的には家斉の子息を中心にして、天保七年（一八三六）十月二十一日から十二年正月十九日までの間に代参がみられる。これには、

如斯文恭院様御公達をはじめ奉り、御縁辺の御方御方御参詣は勿論、姫君様方よりの御代参日々にて、御奉納物

江戸城大奥女性の代参について（望月）

表1 感応寺参詣者一覧 (将軍家・大名)

年号 (西暦) 月日	参詣者	関係
天保 7年 (1836) 10月21日 11月 7日	尾張中納言齋温卿 一橋民部卿 家斉四十五の永姫の婿	家斉46の若君 田安一位公兵部卿齋礼公の御養君
8年 (1837) 10月25日 10月29日	尾張大納言齋温卿 清水内卿	家斉48の若君
9年 (1838) 4月11日 8月13日 9月18日 10月11日 10月16日	松平越前守 松平讃岐守嫡子 松平兵部大輔 松平弾正大弼 田安中納言齋莊卿	家斉49の若君 家斉52の若君 家斉29の若君・文化10年12月25日田安一位齋匡卿嫡子。後年尾州家相続
10年 (1839) 3月 9日 4月13日 10月23日 10月29日 11月 5日 11月 5日	清水宮内卿 田安一位齋匡卿 松平三河守殿奥方 右大将家祥公 松平安芸守段姫君 一橋民部卿 田安右衛門督 田安一位齋匡公	家斉舎弟・天明7年6月13日田安家相続 三河守は家斉37の若君 将軍家第7の若君 安芸守は家斉42の末姫の婿 / 安芸守の妹 家斉甥 一位齋匡公若君
11年 (1840) 2月24日 2月23日	水戸黄門公女隠居 松平三河守女隠居	

10月10日	松平彌正大彌息女	家系四十四の幕代姫の略 有馬玄蕃頭
10月17日	松平彌正大彌父子	
11月2日	田安一位齋匡公	
11月3日	一橋民部卿	
11月5日	田安右衛門督君	
12年(1841) 1月19日	姫路侍從忠学(西井雅樂頭)	
3月25日	有馬玄蕃頭	

は勿論、御祈祷・御回向等の御施物、諸人の耳目をおどろかせり。又、天保九戌年開堂供養も相済ける程に、日萬上人老衰の事ゆへ、住職の知識を撰れける所、中延法蓮寺隱居妙沾院日詮聖人に相極り、則上職に達しける所、同年十月廿四日、日詮聖人住職初祖たるべく旨台命を承り、同十一月二日、日詮上人、寺社奉行衆廻勤、同五日感応寺へ入山の所、新地にて末無縁の事故困窮の所、住職手元さしつかへ可申、依て当分暮し方為御手当、西丸大奥より金貳百両を御内分として下し給り、同年日詮上人登城、住職の御礼御目見、尤御白書院独礼(後略)と、家斉に縁のある大名やその奥向き女性、姫君といった人々の代参であつたことが記され、奉納物・祈祷・回向等に関する施物は、周囲の人々の目を驚かすものであつたことが窺えるのである。十一代將軍家斉は、一橋大納言治済の嫡子であり、十代將軍家治に子がないので一橋家より入つてその養子となり、天明七年(一七八七)に征夷大將軍となつてゐる。そして、天保八年、在職五十一年をして將軍職を家慶に譲つてからも、大御所として天保十二年に逝去するまで、西丸において五年間執政を行なつてゐる。²⁸⁾

この感応寺と江戸城大奥女性とのやりとりに関し、江戸城大奥の飛鳥井他四名が、池上本門寺住持日万に送つた

江戸城大奥女性の代参について(翌月)

江戸城大奥女性の代参について（望月）

書状(2)を紹介したい。

文の様まつまつ上々様方御機嫌よく成らせ給、なお公方様御機嫌よく成らせ給、御めて度さ扱は、此程 御移替二付、猶何之御障りも被為有す、万たん御滞無済せ給、御寿命万々歳天下泰平御長久御繁昌被遊候、御取立成らせられ候感応寺御本堂祖師前において、めうがのため御祈祷随分御申上ケ被成候よし、右二付御巻敷御洗米被遣、めて度とらせ宣敷取計まいらせ候事に御座候、この内有若様へも御同様二御さし上被成度被遣、是又御取らせよろしく取計まいらせ候事二御座候、めて度かしく

（上書）

飛鳥井

瀬(山)やま

華(田)その

滝川

野村

池上日万聖人

これによれば、上々様（十一代家斉）・公方様（十二代家慶）といった人の体調がよい折に、家斉が西丸に無事移ったことが記され、「御寿命万々歳天下泰平御長久御繁昌」といった内容の祈祷を感応寺本堂の祖師に依頼したものである。この関係の史料は、御堂浄蓮寺に十五通残っており、これを差出者、祈願内容といったことを中心に一覧してみると表2のようになる。書状のため、年代が特定できないが、感応寺本堂祖師への祈願となつていたので、感応寺が存在していた時期に限られると思われる。

表2 大奥局祈願一覧

差 出 者	祈 願 内 容
うら辻 小かわ(川) すき岡 かめの 沢をか(岡)	大納言・右衛門督御機嫌よく
飛鳥井 山の井 姉小路 野むら(村) 浜おか(岡)	上々様御機嫌よく・御朱印30石御いたたき
花町 梅たに(谷) 芝山 たき(滝)山	大御台様御機嫌よく・御朱印30石頂戴いただき
花町 梅たに(谷) 芝山 たき(滝)山	大御台様御機嫌よく・御移替滞なく済せ
倉はし(橋) その(園)村 浜川	松栄院様御機嫌よく・洗米上げ
高倉 杉うら(浦) その沢 石井 野川	上々様方御機嫌よく・太歳三ヶ日祈禱洗米差上
山の井 姉小路 はま(浜)岡 たき(滝)津 岩おか(岡)	上々様方御機嫌よく・巻数洗米差上
八重しま ほり(堀)川 歌まち(町) その(園)山 たき(滝)川	
飛鳥井 華その(園) 野村 瀬やま(山) 滝川	上々様・公方様御機嫌よく・御移替
岩岡 八重嶋	大納言様御機嫌よく・大御所様御移滞なく・祈禱巻数献上
飛鳥井 山の井 姉小路 野むら(村) 浜をか(岡) 滝津	上様御機嫌よく・御移替・巻数御洗米御上ケ
花その(園) セやま(瀬山) 滝かわ(川)	大御所様御機嫌よく御移替・巻数御上ケ
飛鳥井 華その(園) 野村 瀬やま(山) 滝川	公方様御機嫌よく
ほり(堀)川 歌まち(町) つほね その(園)山 袖川	御台様御機嫌よく・御移替・巻数御洗米上ケ
花その(園) セやま(瀬山) たき(滝)川	大御所様御機嫌よく・御朱印30石頂戴
飛鳥井 山の井 姉小路 野むら(村) はなまち(花町)	上々様御機嫌よく・庫裏普請荒増出来
滝津 和か川 歌まち(町) つほね(局) そのやま(園山) 袖川	
華町 梅溪 芝山 滝山	御台様ご機嫌よく・巻数洗米差上

(註) ひらがなで書かれている女性名の内、漢字に直せる名前のみ直した。

(出典) 埼玉県浄蓮寺文書(『大田区史』資料編・寺社2所収)

江戸城大奥女性の代参について(野月)

江戸城大奥女性の代参について（望月）

この個々の大奥女性の所属について詳しく知ることは出来ないが、祈願内容は、將軍・御台所といった人々の身体健全が主な祈願であった。感応寺がお取立てになつてからは、三十石の御朱印が幕府より下され、内容も感応寺の普請が終わつたお礼といったものであつた。その折に、祈禱の巻数と洗米を献上している場合もあつた。

こうして感応寺では、「感応寺祖師靈前毎月天下泰平国家安全之御祈禱法華經読誦無解怠別段執行仕候」と江戸城大奥女性より祈禱を依頼されていたが、「未十二月十二日祖師入仏江戸中繁昌七ツ半頃参詣退散 御美代代参勝井代参三保□代参袖鳴代参其外共大勢参詣」と本堂落慶式の折は家斉側室お美代の方の代参として大奥女性が参詣し、賑やかであつた様子が窺える。

四 「榎楓」にみられる代参の様相

ここでは、「榎楓」により、江戸城大奥女性と感応寺のつながりに関する事項をピックアップしてみると、資料的には天保十年（一八三九）正月二十九日から同十二年（一八四一）七月二十五日までの代参に関する内容を窺い知ることが出来る。

そこで、江戸城大奥女性の代参の実態をみてみると、史料的には天保十年（一八三九）十月二十八日の西丸表使嶋田女性と御使番一人が代参した記録が初見である。これから同十二年（一八四一）四月二十九日に榮嘉が代参し、有君容態悪しきに付祈禱を依頼したことまで、約一年七ヶ月の代参の実態が記されている。このつながりについて、分類してみると、水神関係・施餓鬼・宝物奉納・御遺物・十二支祈禱に分けられる。よって、それぞれ内容を紹介し、代参の特徴やその形態について探ってみることにしよう。

(水神関係)

天保十一年(一八四〇)

九月十九日 家斉より当山祖師へ御初尾白銀三枚、水神へ白銀二枚、霊神(大田道灌女)へ白銀二枚のお供えが

ある

十一月十八日 本堂内に勧請される水神へ御初尾として白銀三枚、老女瀬山女性より二百疋、嶋田女性・広瀬女性・

谷浦女性より二百疋、それぞれ奉納がある

十二月一日 西丸嶋田女性より毎年暮、水神宮へ常経料として金二十両の奉納がある

天保十二年(一八四一)

一月十五日 西丸栄嘉・おいた女性代参として白銀三枚を水神宮へ納める。これより正・五・九月に納め、法楽

折袴を依頼する。栄嘉女性、金百疋、おいた女性銀一封・お菓子を持参する

閏正月五日 西丸、金五百疋を奉納する。家斉の小用相増すよう水神宮へ法楽加持の依頼が嶋田・谷浦女性より

申し出がある

天保十一年(一八三九)九月十九日には、家斉より感応寺祖師・水神・霊神へ奉納があったことがわかる。この水神は、本堂内に勧請されるが、嶋田女性は、毎年暮れに常経料として金二十両を奉納している。これが御台所の依頼か本人のものは史料的に判別することはできない。西丸栄嘉・おいた女性は、代参として白銀三枚を水神に納め、特に正月・五月・九月の月には法楽加持を依頼している。また、家斉は天保十二年正月より病床に伏したが、家斉の小用が増すようにと、法楽加持を嶋田・谷浦女性が依頼していることが折願内容からみる特徴である。

（施餓鬼関係）

天保十年（一八三九）

十月二十九日 孝恭院、代々尊霊の菩提のため施餓鬼を依頼する

十一月十日 西丸方々菩提の施餓鬼のため、代参御末頭おたる女性が代参する

天保十一年（一八四〇）

五月三日 本丸暉姫疱瘡に付、祈祷並びに施餓鬼修行を依頼する

天保十二年（一八四一）

二月五日 御台所、明日から七日間施餓鬼修行を依頼する

二月七日 家斉追善のため施餓鬼を行なう

七月十五日 客殿において尊霊菩提のため施餓鬼修行を行なう

將軍家の代々尊霊菩提のために施餓鬼を行なっていたが、西丸大奥女性の菩提供養の施餓鬼のため、おたる女性が代参している。また、暉姫が疱瘡にかかった折、祈祷と施餓鬼供養を同時に行なっている。家斉逝去後には、過去の歴代將軍の追善供養のため、施餓鬼修行を感応寺で行なっていたことが知られる。

（宝物奉納関係）

天保十一年（一八四〇）

五月十九日 西丸 木氏女性、日蓮真筆御消息一幅、日親本尊一幅を奉納する

七月五日 本丸、右大将疱瘡中に付、御幕二張、白銀五枚を奉納する

天保十二年（一八四一）

閏正月十二日 西丸老女瀬山女性、高祖真筆病即消滅御本尊一幅（是は病氣中安藤対馬守献上の品）、当山へ金十

両を添えて奉納する

四月十六日

家斉守本尊普賢菩薩像・秘仏大黒天、是は一橋御館より御身に添えられたもので、官位昇進の時の厨子が出来、七重の厨子入り本堂左の脇壇に安置される。普賢菩薩は内仏間に安置され、遺物金五十両、その外品々御手道具類が奉納される

西丸高木女性は、日蓮消息や日親本尊といった信仰の対象となる宝物を感応寺に奉納している。また、西丸瀬山女性は、安藤対馬守から献上された日蓮筆病即消滅本尊に金十両を添えて奉納している。こうして、礼拝の対象となる日蓮宗先師関係の宝物が感応寺に奉納されているのは特記されることである。他にも家斉守本尊の仏像が奉納され、感応寺に勧請されている。また、家斉疱瘡の折に、その全快を祈って、幕と金品が奉納されている点も着目されよう。（御遺物）

天保十一年（一八四〇）

五月二十九日

本丸貞明院（暉姫）御遺物、谷村女性持参にて奉納する

六月十九日

玫玉院（萬沙姫）屏風一双・六火鉢火覆共一つ・白晒一疋といった御遺物（奉納のため）藤沢女性
その外大勢参詣する

六月二十日

田安御殿町田女性、貞明院御遺物を持参し、代参する

七月五日

本丸、右大将様疱瘡中に付、御幕二張、白銀五枚を奉納する浄欲院（御台所）葬御に付、御遺物金

江戸城大奥女性の代参について（望月）

三十両奉納したい旨、老女楯尾女性、小山女性より申し出がある

十月十八日

本丸川嶋女性・成瀬女性・おさか女性等が代参する。この時小倉女性、紫檀木彫りの香炉台一つ・鰐口の緒一筋、奉納する(浄欲院御遺物)

天保十二年(一八四一)

四月十四日

細川栄照院閏正月二十五日逝去に付、御遺物として後光厳院宸筆法華経和歌の掛軸一幅、所持の鏡二面、使者山下の太兵衛・筒井五郎女が持参する

六月二十日

田安御殿町田女性、貞明院御遺物を持参し、代参する

寺院に日蓮宗ゆかりの宝物を奉納することはよく行なわれるが、貞明院、玳玉院、栄照院、浄欲院といった本丸・西丸女性にゆかりのある宝物を遺物として奉納している例が顕著であった。このことは、両者のつながりの深さを物語るものといえよう。

(十二支祈祷関係)

天保十一年(一八四〇)

五月二日

西丸丑年男性、戌年女性、一切無障礙の祈祷を依頼する

十月三日

田安右衛門督老女町田女性、巳年女性の御初尾として金百疋、靈明院一周忌に付回向料金三百疋を奉納する

十二月八日

祖師本丸へ御上り中、白銀五枚一包・同三枚一包・外に御初尾一通・目録包五十五・銀包二十五・おひねり百四・丑年祈祷御初尾金百疋、浜岡女性より奉納がある

十二月三十一日 来年丑年公方四十九、家斉・御台所共六十九歳を迎えるに付、祈祷料として金五両が下される

天保十二年（一八四一）

閏正月六日 西丸、金三両を奉納する。瀬山老女、巳年男性引移に付、千卷陀羅尼を依頼する

天保十一年五月二日に西丸丑年男性・戌年女性の祈祷を感応寺に依頼している。同年田安御殿老女町田女性が、巳年女性の初尾金として金百疋を奉納しており、干支の中でも特に依頼者の年回りの祈祷が行なわれていたのである。

感応寺の祖師は、天保十一年十二月八日に江戸城に上っており、その奉納金が浜岡女性を通じて感応寺へ送られている。この祖師像の江戸城お上りは、身延山奥の院祖師・古仏堂祖師の江戸出開帳の折も同様であった。²⁶⁾

（文恭院〔家斉〕関係）

天保十年（一八三九）

正月二十九日 西丸、三日間の祈祷を依頼する。一橋のお付老女笹本氏野村女性、家斉大病にて祈祷を依頼する

天保十一年（一八四〇）

九月十八日 白銀御殿細川蓮性院（文恭院妹）、家斉様祈祷料として金三両を奉納する

天保十二年（一八四一）

四月十六日 家斉守本尊普賢菩薩像・秘仏大黒天、是は一橋御館より御身に添えられたもので、官位昇進の時の

厨子が出来、七重の厨子入、本堂左の脇壇に安置する。普賢菩薩は内仏間に安置、遺物金五十両、その外品々御手道具類が奉納される

五月七日

西丸大奥女性四人、当山にて剃髪する。生駒女性（本常院殿妙生日恵法尼）・御老中おとや女性

江戸城大奥女性の代参について（望月）

(成量院殿妙誠日誦法尼)、御老中おるせ女性(深性院殿妙玄日理法尼)、それぞれ御初尾金百疋、山主へ金三百疋・文庫内白輪子一疋、御切手おくの女性(成園院殿位月日照信尼)、御初穂金百疋・山主へ金二百疋、文庫の内白縮緬一疋、他に金百疋文恭院尊前へ、それぞれ奉納がある。この四人、金一両を院家役者四人へ、金二兩二分衆僧十人へ、金百疋待者二人へ、金一両香刺僧へ、金五十疋用部屋へ、金百疋働の者へ、金百五十疋下男山番へ、蒸籠五組惣中へ、それぞれ奉納する

五月八日

清水御殿、代参として八十浦女性を遣わし、来る十日家斉百ヶ日に付、御法事料として白銀五枚・御初尾金百疋貫主へ、汐見饅頭一折中納言より外に金百疋・御初尾金百疋・文庫の内白羽二重一反を山主へ、八十浦女性より金五十疋・御初尾・蕎麦一組・干菓子一折、それぞれ奉納する

家斉菩提のため、駒野女性が追善料として永代金五十兩ずつ、毎年正月・七月両度に下される旨を伝える

十一代將軍家斉は、普賢菩薩を守り本尊としていたことがわかる。家斉は天保十二年(一八四一)閏正月晦日に逝去したが、これに伴い、一橋家より拝領した秘仏大黒天は感應寺の本堂に、普賢菩薩は内仏間に安置され、遺物金やその他のゆかりの品々が奉納された。清水御殿よりも、五月十日は家斉百ヶ日忌につき、法事料として白銀三枚他の奉納があった。西丸女性の、生駒女性・御老女おとや、老中おるせ、お切手おくの女性が感應寺にて剃髪していることは、信仰的にも着目すべきことである。特に家斉が逝去せられて後、これらの大奥女性が仏門に入ったということが特筆すべきことといえよう。

(千卷陀羅尼関係)

天保 十年（一八三九）

四月四日 大輿嶋田女性、本丸亀五郎君御不例に付、祈禱のため千卷陀羅尼修行を依頼する

天保十一年（一八四〇）

正月二十日 西丸、家斉容体悪化に付、三日間の祈禱を依頼し、千卷陀羅尼が修行される

五月五日 家斉、御台所の千卷陀羅尼を依頼する

十一月十九日 家斉祈禱のため千卷寿量品を讀誦し、小倉女性、布施として金五両を奉納する

西丸滝沢女性、千卷陀羅尼の布施として金三両を奉納する

天保十二年（一八四一）

閏 正月六日 西丸、金三両を奉納する。瀬山老女、巳年男性引移に付、千卷陀羅尼を依頼する

閏正月十日 姫路侯の代参として石本勝左衛門が白銀七枚を持参し、西丸様祈禱として三日間、千卷・寿量品修

行を依頼する

家斉や御台所の祈禱のため、千卷陀羅尼修行や千卷寿量品を感應寺に依頼している。また、本丸亀五郎の調子が悪いので、千卷陀羅尼修行の祈禱を依頼していることが注目できる。

（疱瘡関係）

天保十一年（一八四〇）

三月二十七日 右大将疱瘡に付、祈禱を依頼する

四月二十日 〔右大将〕疱瘡後に付、祈禱を依頼する

江戸城大輿女性の代参について（望月）

江戸城大奥女性の代参について（望月）

四月二十四日 本丸暉姫疱瘡に付、折祷を依頼する

五月三日 本丸暉姫疱瘡に付、折祷並びに施餓鬼修行を依頼する

七月五日 本丸より右大將様疱瘡中に付、幕二張、白銀五枚を奉納する

江戸時代後期には流行病として疱瘡が流行っており、家斉の子女五十五人の全員が疱瘡と麻疹にかかり、二人が疱瘡で死亡している。天保十一年には本丸暉姫、家斉が疱瘡にかかっており、大奥女性は感應寺に平癒のための折祷を依頼している。

（御符関係）

天保十一年（一八四〇）

五月二十五日 右大將様六・七月中の内、難病あらせらるに付、二ヶ月間御符が授与され、一日金一朱ずつ、計銀

六枚が奉納される

十二月四日 本丸於美津方、右大將様御符料として金一兩二分・御初尾金二百疋を奉納する

十二月十二日 有君御不例の節、御符献上に付、本丸より白銀三枚が下される

天保十二年（一八四一）

閏正月十二日 本丸右大將様御腹於美津方御部屋局さよの、右大將様月並みの御符料として金一兩二分、怨敵退散の折祷料として金二百疋の奉納がある

閏正月二十四日 本丸小野田女性、金五百疋を奉納する。これにより右大將様が全快になり、御符が授けられる。

家斉が難病にかかった折、二ヶ月間御符が授与されている。また、家斉は月並みの折祷として御符料を感應寺に奉

納し、怨敵退散の祈禱を依頼しているのである。いずれにしても、感応寺からの祈禱として御符が授与されたことがわかる。この記録には、江戸城内のみではなく、徳川御三卿の一橋家・田安家・清水家の女性とのつながりもみられる。そこで、御三卿大奥女性の信仰形態をみると、次のようになる。

(一橋御殿)

天保十年(一八三九)

正月二十九日 西丸、三日間の祈禱を依頼する

一橋のお付老女笹本氏野村女性、文恭院大病にて祈禱を依頼する

九月二十一日 一橋館、夜中祈禱を依頼する

天保十一年(一八四〇)

二月 一橋御守殿(永姫)、常盤橋御殿(浅姫)、大手前御住居(千代姫)、日比谷御住居(盛姫)、本郷御

住居(溶姫)、尾州・紀州・水戸峯樹院、明石、川越その外、白銀三枚ずつ奉納する

十月二十二日 一橋民部卿祈禱として桜井女性・三輪野女性が白銀二枚を奉納する

十一月七日 一位様御容態に付、一橋民部卿が祈禱を依頼し、金三両老女野川女性より申し出がある

十一月二十一日 大御所御不例に付、一橋老女野川女性が祈禱料として白銀二枚を奉納する

十一月二十九日 一橋民部卿誕生日に付、広瀬女性が金百両を奉納する

十二月四日 一橋民部卿、大御所様祈禱料として金三両奉納する旨、野川女性より申し伝えがある

十二月十八日 一橋御殿広蘭女性・沢井女性、例年の通り、お歳暮白銀三枚を奉納する

江戸城大奥女性の代参について(望月)

江戸城大奥女性の代参について(望月)

十二月二十九日 一橋民部卿、毎月女中衆が大乗院へ参詣し、題目を唱えるに付、挨拶として金三百疋奉納する旨、野川女性より申し伝えがある

天保十二年(一八四一)

閏一月十七日 一橋御殿、金三両、御初尾金百疋を遣わす。野川女性、家斉大切に付、御台所御心痛の趣、民部卿より心配あつて祈禱をお願いしたい旨を依頼する

四月十六日

家斉守本尊普賢菩薩尊像・秘仏大黒天、是は一橋御館より御身に添えられ官位昇進の時の厨子がかき、七重の厨子入り本堂左の脇壇に安置する。普賢菩薩は内仏間に安置し、遺物金五十両、その外品々御手道具類を奉納する

七月十七日

一橋御殿より大嶋・盛岡その外大勢が来山し、山中に赤飯が配られる

代参の女性として老女笹本・野村・桜井・三輪・野川・広蘭・沢井・大嶋・盛岡・広瀬があげられる。一橋家民部卿は、家斉御不例の折に感応寺に祈禱を依頼しており、毎月一橋大奥女中衆が大乗院へ参詣し、題目を唱えている。他にも、多くの女性が感応寺に代参しているが、家斉自身が一橋家出身であり、一橋家は熱心な法華信仰をもつていたといわれている⁽²⁸⁾。よつて、これらはその信仰的なつながりの深さを示している内容といえよう。

(田安御殿)

天保十年(一八三九)

十二月二十四日 田安一位嫡男右兵衛、当山へ納める床柱其の外十六本、石數十、金子五十両、回向料白銀三枚、田安家御物頭山本十郎兵衛他が持参する。これをもって、新規に内仏間、居間等が普請される

天保十一年（一八四〇）

六月二十日 田安御殿町田女性、貞明院御遺物を持参し、代参する

七月八日 田安御殿老女町田女性が参詣し、一位館にて糸の緒をおらせ、源齋匡の認めた鬼子母神の画像を奉

納する

七月二十四日 尾州御本殿老女蘭井女性、田安清寤院永代回向料として金七両、自身も金二百疋を奉納する

十月三日 田安右衛門督老女町田女性、巳年女性の御初尾として金百疋、靈明院一周忌に付回向料金三百疋を

奉納する

十一月六日 町田女性、田安一位少々容態悪しきに付、祈祷料金二百疋を奉納する旨、申し出がある

十二月十日 田安一位自筆の涅槃像大幅一幅、表具衣地、御紋散の画（いずれも極彩色）、表具代として金三両、

箱代として金一両二分を奉納する（当山第一の靈宝）。

十二月二十九日 若浦女性、田安一位床上げに付、白銀二枚・お歳暮金二百疋を奉納する旨、申し伝えがある

天保十二年（一八四一）

二月四日 田安一位、当春家斉より拝領した梅樹二株を奉納する

三月二十三日 田安御殿より町田女性が代参し、一位様より依頼のあった寛徳院・無量院・本徳院・靈明院尊霊水

代追善料として金二十両を奉納する

四月八日 田安公染筆の涅槃像表具完成に付、誕生会に諸人が拝する。諸地極彩色にして幅凡そ二間余、長さ

三間余、今は池上本門寺にあり

江戸城大奥女性の代参について(望月)

田安御殿の老女町田女性が、貞明院(暉姫)遺物を感応寺に奉納している。田安一位は、寛徳院・無言重院・本徳院・靈明院の永代追善料として二十両を感応寺に奉納している。田安御殿には田安一位の自筆による涅槃像一幅があり、仏画も描いていたようである。

(清水御殿)

天保十一年(一八四〇)

十一月九日 清水御殿より藤村女性が代参し、恭真院(式部卿齋明卿後室)が書写した法華經一部、金五十兩外

に 御初尾金百疋を奉納する

十二月十五日 浦野女性、清水宮内卿君が中納言に昇進に付、御初尾として白銀二枚下されるの由、申し伝える

天保十二年(一八四一)

閏一月十六日 清水御殿浦野女性、御紋付服紗三つの代金四兩二分と銀二角五分を奉納する

四月八日 清水御殿、鐘樓寄進として金百両を奉納する

五月八日 清水御殿より代参として八十浦女性が遣わされ、来る十日文恭院百ヶ日に付、法事料として白銀五

枚・御初尾金百疋貫主へ、汐見饅頭一折中納言より外に金百疋・御初尾金百疋・文庫の内白羽二重

一反を山主へ、八十浦女性より金五十疋御初尾・蕎麦一組・干菓子一折、それぞれ奉納する

代参の女性として、藤村・浦野・八十浦女性が感応寺に参詣しており、恭真院(式部卿齋明卿後室)の書写した法華經一部を奉納している。

こうして感応寺との結びつきは、江戸城本丸・西丸を始め、御三卿の大奥にも及んでいたわけである。そして、天

保九年七月二十日から二十七日の八日間にわたり、感応寺本堂の開堂供養が行なわれた際にもこれらの結びつきはみられた。すなわち、江戸城大奥女性の施主日が表3のように決まっていたのである。

表 3 大奥女性施主日一覧

日	施主名	供養經典 読経者
20日	西丸瀨山	序品 池上貫主日万・方便品 能成院・饗餼品 照米院・信解品 日蓮
21日	本丸浩岡 西丸花町 小野日向守殿	薬草品 理境院・授記品 文承院・化城品 慈天院・五百品 上千葉日隣
22日	本丸瀧津	入記品 能成院・法師品 文承院・宝塔品 常精院・提婆品 中延日詮
23日	西丸瀧山	勤持品 能成院・安楽品 照米院・涌出品 日雄・寿風品 真間貫主日暉
25日	本丸興津氏女性	神力品 能成院・属累品 照米院・薬王品 文承院・妙音品 日修
26日	中野氏成年女性	普門品 理境院・持持品 能成院・嚴王品 日袋・普賢品 池上御庵日教
27日	戸田氏女性	惣供養・音楽・兒・十種供養・施餓鬼・放生会・投餅

これによれば、二十日は、西丸瀨山女性、二十一日は本丸浩岡女性と西丸花町女性他、二十二日が本丸瀧津女性、二十三日が西丸瀧山女性、二十五日が本丸興津女性、二十六日が中野氏成年女性、二十七日が戸田氏女性となっている。中野氏女性はお美代の方の施主ということであり、戸田氏はお瑠璃の方が施主となっている日である。すなわち、二十日から二十七日までが江戸城内の大奥女性が施主日であり、供養する日として決まっていた。中回向日には文承院の高座説教と祈禱があったが、これは表4の通りであり、この折の寄進の品として幢幡一對を田安御殿御園女性、内陣銀燭台一對と仏天蓋一つを西丸中野氏お美代の方といった家斉側室が寄進している。家斉が晩年に寵愛した側室

江戸城大奥女性の代参について(翌月)

江戸城大奥女性の代参について(註月)

表 4 中回向日寄進の品一覽(牛込普国寺文承院高座回向祈祷)

宝物名	施主	備考
燗燗一对 台子一式 大湯風爐道具一式・銅大葉羅其外小道具・銅大長火鉢 鬼子母神十羅刹女神画像一幅 内陣銀燭台一对 仏天蓋一ツ 菅貝御文台一 本二三御膳具一式 祖師御衣 赤地錦御戸張 客天蓋一ツ	田安御殿 一橋御殿 一橋御殿 一橋御殿 西丸中野氏 西丸戸田氏 西丸木氏 西丸中野氏 西丸中野氏 申年御女性	発願主御園女性 お美代の方 お瑞璋の方 おいとの方 お美代の方 取次 奥村伊勢

にお以登の方とお美代の方がいる。⁽⁸⁾ お以登の方には、千三郎という子供がいたが、生来視力が弱く、盲目子とさえいわれた。これが、中延法蓮寺日詮の祈祷によって視力が回復し、福井松平斉承家の養子となり、さらには福井七十五万石の嗣子となったことから法華信仰に入っている。一方お美代の方は、『徳川諸家系譜』では養父は中野碩翁となっているが、実父は中山智泉院の僧日啓であったといわれている。⁽⁹⁾ お美代の方は、天保八年二月七日に「御美代病氣二付祈祷林昌寺宇了二日二御ふう洗米為持参遣ス三月十四日頃也陀羅尼千卷与誦」と病気の折に、池上林昌寺に御符を求め、千巻陀羅尼祈祷を依頼している。

こうして感応寺は女縁によって幕府の祈祷所となり、寺域を賜って伽藍を造営したが、下絵中山の法華経寺とともに大奥女中の不義を働いたといわれている。⁽¹⁰⁾ この江戸城大奥祈願所となっていた寺院は、日蓮宗として中山法華経寺・

下谷法養寺があげられる³⁾。これらの寺院は、江戸城大奥女性の依頼によりその祈願を行なっていた寺院であり、感応寺も、これらと同格の存在であったと考えられる。しかし、この江戸城本丸と西丸大奥内では、主に日蓮宗と浄土宗の信仰があつたといわれており、その宗派的な対抗意識があつたことが報告されている⁵⁾。

次に、感応寺の奉納品の性格をみると、表5の如くであり、(a) 廣大院寄付といったように寄付として納める、

表5 感応寺奉納品一覧

奉納者	経緯	宝物名
□□	寄付	高祖大菩薩十界勸請病即消滅本尊一幅
廣大院	寄付	高祖真筆十界勸請本尊一幅、梨子地御紋ちらし御手箱一つ
浄欽院	遺物	梨子地金御紋散し御守刀箱一つ、地黒塗糸車に蘭沈金彫御料紙硯篋一組
本丸貞明院	遺物	布袋の燭台、糸細工の□、御紋付黒塗御盥御湯桶一組
本丸玳玉院	遺物	御台子一組、但役付小道具共一式、金御紋付大火鉢一つ、御火覆共
本丸跡部氏お美津の方	奉納	高祖大菩薩御真筆消息一幅(日遠極付)、鍋冠日親十界勸請受茶羅本尊一幅
西丸中野氏お美代の方	奉納	池上二十五世日顕本尊一幅(惇信院殿家重公御疱瘡の時、台命により御懐中守に献上 開運疱瘡守護の本尊也)、感応寺境内分間地図、銀座秋山内記進上・鏡御本尊(日々写せば鏡の内に題目現れる)、(佐渡の国の神主の男火消子何某より進上)銀の燭台一对(高二尺寸)、受皿台共ギヤマン(菊座惣体菊の毛彫 シン切共)
西丸戸田氏お瑠璃の方	奉納	唐貝入菊の蒔絵御文台、金御紋付長柄桑柄御銃子一組
開山日萬	感得	養珠院お萬の御方御襟掛法華經一部・紺紙金泥京人の筆(日遠数年感得の所、養珠院日心尊尼へ授与、書御判あり、守は金地へ金の紋付、外篋黒塗金紋付)、高祖大菩薩御自画御影一幅(水鏡の御影と云)、日朗作帝釈天尊像一体(御丈一尺斗)、同御真筆首題両尊平尉子入(加藤清正添状・日遠極付)、天台大師御影(池上十一世日現極付)、加藤清正筆三十番神勸請本尊一幅(高麗日遠

江戸城大奥女性の代参について(野田)

<p>一橋館 清水館</p> <p>細川松栄院 初祖日詮</p>	<p>寄付 寄付</p> <p>遺物 感得</p>	<p>上人極付)、池上九世日純十界勸請本尊一幅(雷除の本尊と云)、兆殿司筆十二天絵二幅、毘沙門天像・誕生仏 田安一位寄付、諸地極彩色御白画大涅槃像一幅・一品源齋匠の筆(養華翁の御印交有)、高祖大士・六九中老僧画像自筆一幅、蓮糸地へ自画極彩色愛敬鬼子母神御影(源齋匠と御名印あり)</p> <p>(法華經一部・無量義經題目卷萬三千遍の文字を以画たる)鬼子母神・十羅刹女神の□像一幅有栖川恭真院様御書写法華經一部(村雲御所瑞鷲宮御開眼越前家千三郎より寄付)、子の日小松盛の御掛物、住吉廣行の画、大御紋付廣蓋二枚</p> <p>後光嚴院宸筆一幅、法華經安樂行品の御縁歌</p> <p>高祖大菩薩消息一幅、遠沾院日亨十界勸請本尊(劍難除の本尊と云)、同法華經三ノ卷一卷、中山日祐本尊一幅、行学院日朝真筆御本尊一幅、日章池上二十七世本尊一幅、身延山三哲本尊三幅、日重・日龍(乾)・日遠、池上十三世日尊本尊一幅、日朝徳行記一卷、口禊本尊一幅、寿量品の掲石摺、智恩院宮二本親王懐紙一幅、加茂競馬絵巻物一卷、名僧百人一首(絵は土佐家・狩野家・雪舟家等寄合書・和歌は堂上方寄合書・古筆書極付)、嶋桐白木地へ金銀砂子高蒔絵文台・同硯筥・細穂蒔絵料紙硯筥一組</p>
--	-----------------------------------	--

(註) □は判読不能な文字

(b) 浄歎院御遺物といったように、遺物として納める、(c) 本丸跡部氏お美津の方より奉納といったように、奉納として納める、(d) 開山である日萬が感得、といった種別に分けられる。これらは、將軍家や大奥女性が使用していたものやゆかりの宝物が中心であったが、中には礼拝の対象となる曼荼羅本尊や法華經といった経典類、天台大師御影といった画像類、六老僧日朗作帝釈天像・毘沙門天像といった仏像類も含まれていた。西丸お美代方より奉納があった池上本門寺二十五世日頭本尊は、家重痘瘡の折に懷中守として献上されたもので、「開運痘瘡守護の本尊」といわれているものである。田安一位は、自筆の涅槃像一幅や鬼子母神御影といった仏画を描く程の篤信家であったと

思われる。また、感応寺には家斉親族の遺物が奉納されたが、これにより將軍家ゆかりの寺院としてのつながりが深まり、これを基に信仰を介したつながりが形成されていったと考えられる。

まとめに

以上、江戸城大奥女性と感応寺の関係について、特に信仰を介したつながりにスポットをあててみてきたが、まとめてみると、次のようになる。

- ① 大奥関係菩提のために施餓鬼供養を感応寺に依頼する。
- ② 大奥女性ゆかりの宝物を感応寺に奉納する。
- ③ 十二支の年回り、疱瘡平癒の祈禱を感応寺に依頼する。
- ④ 十一代將軍家斉、江戸城大奥ゆかりの人々の追善供養を感応寺に依頼する。
- ⑤ 感応寺の祖師・水神・靈神に奉納する。
- ⑥ 感応寺の御符を求める。

感応寺に勧請される仏像は、江戸城大奥女性の寄進したもので、礼拝の対象となる仏像であった。この仏像に対し、大奥女性は回向・祈願を行っていたが、特に、水神へ正月・五月・九月の祈願月に法楽加持を依頼していることから、水神信仰が顕著であったことを窺い知ることができた。また、本丸・西丸大奥女性のみならず田安御殿・清水御殿・一橋御殿といった御三卿大奥女性も感応寺に代参していることも着目される点である。

天保六年（一八三五）に発願され、同十一年（一八四〇）には取り潰しになった感応寺であるが、史料的には天保

九年（一八三八）から同十一年（一八四一）にかけて大奥女性が代参したことが判明した。このことからいえることは、この間江戸城大奥の祈祷所として君臨していたということである。大奥女性は、奉納金や供物を奉納し、代参者の感応寺への出入りは毎月絶えなかった。一般的に、江戸城大奥に仕えている女性にとつて寺院への代参は城外に出る機会となつたから、御台所や中臈の使いとして頻繁に神社仏閣に参詣したといわれている。感応寺の場合も、御台所の代りとして大奥女性が代参したが、ただ参詣したばかりではなく、本人も祈祷や回向といった仏事を依頼し、感応寺の祖師や礼拝の対象となる仏像や本尊に祈りを捧げていたことは注目すべきことである。この祈りも現世利益を反映したものであり、御符やお札も頂戴していたことから、依頼した御台所は勿論のこと、代参を実際におこなつた老女や表使・御使番といった女性の中には信仰を介してつながりがあった女性もいたと考えられる。

將軍家や將軍自身は菩提寺があり、天台宗・浄土宗の信仰が中心であつた。しかし、大奥女性の中には、念仏の信仰を持つものと題目の信仰を持つものが二分しており、題目信仰に関しても、それぞれグループ単位で、城内で信仰活動を行なつていたことが考えられるのである。

註

- (1) 「日本史広辞典」山川出版社代参の項目。
- (2) 桜井徳太郎「講集団成立過程の研究」二四八頁。
- (3) 拙稿「江戸城大奥女性の法華信仰」（『大崎学報』一四六号所収）・「幕末期の社会と法華信仰」（立正大学日蓮教学研究
所編「日蓮教学とその周辺」所収）・「江戸城大奥女性の稲荷信仰」（『大崎学報』一五〇号所収）等があるので参照されたい。

- (4) 高柳光寿「江戸城大奥女性の生活」八二―九七頁。
- (5) 大谷木醇堂「灯前一睡夢」に「世上にて延命院の事績を喋々すれども、この智泉院、感応寺の不埒、不始末、不届に比すれば日潤、柳全が罪悪はいわゆる大倉の稗米に過ぎず」と、延命院事件は大奥の女中と破戒僧日潤の桃色事件として、智泉院事件は中山法華経寺内の智泉院を將軍家の菩提寺とし、感応寺事件は、新たに一寺を建立して、これを將軍家の菩提寺にしようと企てた事件といわれている。
- (6) 「天保年間における鼠山感応寺の興廢」(『大崎学報』一〇〇号所収)
- (7) 「江戸学事典」(弘文堂)富くじの項目。
- (8) 天王寺は、現在天台宗寺院として台東区に存在している。
- (9) 「榎楓」地の巻、東京都豊島区雑司が谷法明寺所蔵(新編若葉の梢刊行会刊「新編若葉の梢」所収)。以下、特に注記のない限り、同史料によるものとする。
- (10) 高柳前掲書九四―九五頁。
- (11) 高柳前掲書二六九―二七四頁。『徳川諸家系図』第二。
- (12) 「巷街叢説」(続日本随筆大成「近世風俗見聞集」九所収)
- (13) 「世珍録」
- (14) 「谷中感応寺を雑司谷鼠山に移し谷中を天王寺と改む」(『江戸叢書』卷八、一三三頁所収)。
- (15) 「瑞輪寺沿革史」(谷中瑞輪寺刊)。また、「燈前一睡夢」にはこの祖師像が城中で作らせたものであると記され、さらにこの像は取り潰した後、池上本門寺に納まり、後に新宿柏木常円寺に移った。現在は八王子大法寺に移され、八王子感応山日蓮堂に安置されている、と伝えられている。
- (16) 「大田区史資料編寺社」所収。
- (17) この本堂の用材は、一時比企谷妙本寺に置かれ、後に身延山久遠寺本堂の一部として使用されたといわれている(『身延山史』一一六―一一七頁)。
- (18) 「榎楓」紹介文(新編「若葉の梢」所収)。
- (19) 「感応寺を毀つ」(『江戸叢書』卷八、一三三頁所収)。

江戸城大奥女性の代参について(望月)

江戸城大奥女性の代参について(望月)

- (20) 徳川幕府家譜(『徳川諸家系図』第一所収)。
- (21) 埼玉県秩父郡浄蓮寺所蔵文書(『大田区史資料編・寺社2』所収)。
- (22) 「感応寺興隆記」(『大田区史資料編・寺社1』所収)一五二三頁。
- (23) 右同、一五二七頁。
- (24) 徳川幕府家譜(『徳川諸家系図』第一所収)。
- (25) 「国史大辞典」(吉川弘文館)家斉の項目。
- (26) 拙稿「江戸城大奥女性の法華信仰」(『大崎学報』一四六号所収)。
- (27) 「江戸学事典」(弘文堂)流行病の項目。
- (28) 感応寺の近隣に存在した寺院である。
- (29) 一橋家は、本山誕生寺(千葉県安房郡天津小湊町)の祖師堂を奉納しているほどの篤信家であった(『天津小湊町史』史料集)。
- (30) 高柳「前掲書」二七五頁。
- (31) 「藤岡屋日記」によれば、天保十二年十一月五日に寺社奉行により「祈祷所」として認められ、同寺塔中の智泉院は「祈祷御法用取扱所」となっている。
- (32) 「感応寺興隆記」(『大田区史資料編・寺社1』所収)一五二七頁。
- (33) 本多辰次郎編「類從伝記大日本史第二卷將軍・執政篇」では、「將軍家斉が晩年に寵愛したお美代の方の養父は中野碩翁であるが、実父は雑司谷感応寺の僧日啓であった。この寺は女縁によつて幕府の祈祷所となり、寺域を賜つて伽藍を造営し、下総中山の法華経寺とともに大奥の女中に不義を働いた。」(三三二頁)としている。
- (34) 拙稿「江戸城大奥女性の稲荷信仰」(立正大学日蓮教学研究所編「日蓮教学とその周辺」所収)。
- (35) 「類從伝記大日本史第二卷將軍・執政篇」には、「將軍家の香華院である増上寺では、本丸將軍附きの女中に手を入れて、その帰依を促したので、本丸と西丸の女中は日頃軋轢していたので、かくて浄土宗と日蓮宗の争いとなつたといふ。そのためか家斉の不例も表向きへは披露せず、智泉院の住持日尚が奥向き庭口より日々祇候して祈祷した」(三三九頁)とある。